



目次

何をどう残してきたか **文化財とその保存修復** 13

三輪 嘉六

『神仏分離令』と『古器・旧物保存方の届出』 / 臨時全国宝物取調局による全国的な文化財の鑑査 / 『古社寺保存法』の制定へ / 文化財の保存とは

天平文化を今に伝える **正倉院宝物の保存修復** 19

成瀬 正和

校倉と調湿作用 / 宝物修理の先駆け / 御物整理掛による修理 / 今日の修理 / 人が守る正倉院宝物

現代に生きる伝統技術 **絹絵の修復** 33

岡 岩太郎

絵画や書の保存・修復にあたっての基本 / 修復技術の変遷 / 『伝源頼朝像』の修復例 / 画面の状態と修復例 / 修復終了と保存

古代へのロマン **藤ノ木古墳出土遺物の保存処理** 45

肥塚 隆保

保存処理前の診断 / 保存処理 / おわりに

飛鳥の名画を永遠に **国宝高松塚古墳壁画の保存修復** 65

増田 勝彦

保存方針と保存施設 / 壁画の修復 / 作業手順 / 接着のバランス

岩のみほとけの心を現代に **国宝白杵石仏の保存修復** 73

西浦 忠輝

白杵石仏(磨崖仏)群 / 保存、修復、整備の歴史 / 保存修復整備事業(昭和55年~平成5年)の内容 / 大日如来座像の修復の論点 - 何をどう残すのか? / おわりに

阪神・淡路大震災からの復興 **旧神戸居留地十五番館の修復** 87

村上 裕道

被災文化財の復旧概要 / 何を残し、どう決めるか / 構造補強に関する考え方 / ケーススタディ - 耐震対策委員会の協議過程 / まとめ

質疑応答 105

保存・修復に使われる新旧材料の特徴 / 合成樹脂の特性と適性 / 保存すべきものの基準 / 助けるものを選ぶにあたって / 残すことにどんな意味があるのか / おわりに

何をどう残すのか？

文化財の
保存と
修復

天平文化を
今に伝える



成瀬 正和

宮内庁正倉院事務所
保存課保存科学室長

昭和53年東京芸術大学大学院
美術研究科修士課程修了。
専門は保存科学。特に古代材
料史。現在は金属、顔料を中
心に研究を進めている。
論文に「正倉院の銅製品」
、『金属博物館紀要』14、1989）、
「奈良時代の鉛系白色顔料」
、『正倉院年報』14、1992）、
「正倉院の顔料調査」、『仏教芸

正倉院宝物の
保存修復

天平文化 を今に 伝える

ここでは3つの話題を提供します。第1は、正倉院宝物は校倉の校木の開閉作用が作り出す良好な保存環境のなかで保たれてきたといわれますが、実際はどのようなものであったかということです。第2は、正倉院宝物の修理は100年以上の歴史をもっていますが、明治時代の修理を中心に、その実例を紹介することにします。第3は、正倉院宝物の保存に対する現在の正倉院の基本的な戦略についてです。

校倉と調湿作用

正倉院は東大寺大仏殿の北西約300 mに位置しています。その明治5年の風景を図1に、現在の様子を図2に示します。正倉院は、総高が9.4 m、間口が33 mという大きな建物です。瓦葺き、総ヒノキの寄せ棟造りで、北倉、中倉、南倉の3倉からなり、それぞれの内部は2階造りで、さらに屋根裏もあります。そこに聖武天皇の遺品と東大寺の仏具など約9,000点の宝物が伝えられてきました。

ところで、正倉院宝物が1,200年の長きにわたって保存されてきた理由について、多くの方は次のような話を聞いたことがあるのではないのでしょうか。

「校倉には、湿気の高い時期には校木(図3)が膨張して隙間をふさいで、湿った外気を庫内にいれず、逆に乾燥する時期には校木が収縮して隙間が開いて、乾燥した外気をなかにいれることにより、庫内を低湿に保つ作用が備わっている。このことによって、宝物が長く保存されてきたのである」と。

この説を最初に提唱したのは、江戸時代後期の学者・藤貞幹^{とうていかん}であるとされて

図1 明治5年の正倉



います。建物の調湿作用に着目したのは卓見ですが、その説明を木の隙間の開閉に求めたことは、残念ながら間違っているといわざるを得ません。つまり、外気に対して、庫内での相対湿度の変化が緩和されていたということは事実ですが、結論からいえば、それは木自体に備わった吸放水能による調湿機能に基づくものです。宝物はヒノキ製の建物、いかえれば、大きな木の箱のなかに納められています。そして、ほとんどの宝物は、庫内でさらにスギ製の唐櫃からびつのなかに納められていました(図4)。つまり、外気に対して、二重の木箱にいれていたとみなすことができます。それとあわせて、建物が高床で床下の風通しがよいこと、また唐櫃自体もほとんどは有脚で、床との間に隙間があったことも湿気を防ぐために重要でした。

この庫内の温湿度については、昭和24～34(1949～59)年に、大阪管区气象台および奈良地方气象台によって調査が行われました。正倉院は勅封であるため、いったん倉が閉封になると、その後10ヵ月は開かれることがないので、400日巻の毛髪式温湿度計を特別に製作して温湿度の測定を行ったのです。図5は、昭和26年の開封期間中のもので、温湿度計を調整している様子が写されています。この調査によって、庫内相対湿度の日変化の振幅は外気に比べて10%程度であり、また唐櫃内の相対湿度の日変化幅は



図2 現在の正倉



図3 正倉の西南隅
(校木の様子)
(口絵カラー参照)



図4 唐櫃(正倉院宝物)